
テニ恋!!

幽鬼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テニ恋!!

【Nコード】

N1739K

【作者名】

幽鬼

【あらすじ】

赤坂結衣は立海に通う中学3年生。柳生比呂士に想いを寄せているが思った以上に障害があった：

序章

私は立海大附属3年の赤坂結衣。生まれは千葉、親の都合で神奈川に引っ越してきた。最初は嫌だった。仲良くなった友達と別れるなんて、考えられなかった。でも、今は楽しく思ったりもする。たまに千葉の方に行くし、悪いとは思わなくなってきた。

「赤坂さん」

名前を呼んだのは同じクラスの柳生比呂士くん。私は密かに柳生くんのことが好きだったりする。ああでも絶対に叶わない想いだよね。柳生くん、結構人気あるし：

「赤坂さん」

「ふえ、ご、ごめん。どうしたの」

「最近、よく眠れていないのでは？目元にクマが…」
と、柳生くんの長くて白い手が私の頬に触れた。

「だ、大丈夫だよ。それより、あっちにいるの、仁王くんでしょ」
教室の前にいたのは仁王雅治くん。テニス部で詐欺師と呼ばれてる。

「ああ。では、失礼」

柳生くんは仁王くんの元へ行ってしまった。

「結衣、柳生くんと何話してたの？」

友達の有加里ちゃんが話しかけてきた。

「大したことは話してないよ」

「だって、柳生くん結衣の頬に触れてたじゃん。てゆうか、もう告っちゃいなよ、柳生くんも結衣のこと、好きかも知れないし…」
そんな勇気ないよ…柳生くんが私を好きだなんて、絶対にない。それは断言できる。

あ、メールが来てる。誰から：

『ヒカル』

ヒカルは千葉にいた頃ずっと遊んでた幼馴染。内容は：

『今日、そっちに遊びに行く。学校で待ってる』

え、部活は…と思い、部活はないのか、とメールを返した。

『オジイが休みをくれた』

そっか…ヒカルが来るんだ…と、私は少し嬉しい気持ちになった。

「なーに笑ってんの」

「内緒だよ」

この時私は気付かなかった。殺気染みた視線に…

放課後

放課後、部活に入っていない私はそのまま学校を出ようとした。

「結衣」

落ち着いた声で私を呼んだのはヒカルだった。

「ヒカル！私の方が年上なんだから一応さんはつけるべきでしょ」

「今更必要ないだろ。それより、移動しよう。目立ってる」

確かに他の中学の男子が立海の前にいるのは目立つ。それに、テニス部が黙ってないかもしれない。

「調子はどう？」

「好調、好調、校長先生……ブツ」

黒羽君、苦勞するよね……こんなダジャレに付き合わされて……

「……ダジャレがいまいちなのはいつも通りか」

「昔みたいに突っ込んでくれよ。俺が滑ってるみたいじゃん」

「みたいじゃなくて、滑ってる。もうちょっといいのないの？」

でも、こんなくだらないダジャレ聞いていると落ち着く自分もいるんだよね。

「ヒカルってさ、彼女はいないの」

「いない」

そ、即答された……

「恋の相談って……大丈夫？」

「恋、恋か……」

「ダメ、かな……」

「恋の話ならどんとこい……ブツ」

……少しムカついたから頭を叩いた。

近くの公園のベンチに私達は腰掛けた。

「私ね、柳生くんのが好きなんだ」

「柳生……立海の紳士か……」

ヒカルが黙りこんだ。何、悪いこと言ったの？

「……ここは真摯に行くべき……ブツ」

「本気で怒るよ」

「ちょ、待った！俺は本気で言ったんだ。柳生さんはジェントルマンで、誰にでも平等に接すると思う。だからひたすらアピールするしかない」

そうかあ…でもどうすればいいの…

「正攻法が成功法だ…ブツ」

なんか、いつもよりヒカルのダジャレが冴えてきていると思うのは私だけかな。

「あゝあ、ヒカルと一緒にいたら千葉に帰りたくなってきたなあ」
みんなと一緒に潮干狩りして…神奈川にも海はあるけど、千葉の海がいい。

「潮干狩りする時は連絡してやる。そしたら、来ると良い」

「ホント!？」

「うい」

「約束だからね」

と、指切りをした。そのあと、他愛のない話をしてたらもう空が暗くなっていた。

「ありがと。いろいろと」

「元気そうだなによりだった。じゃあ、また来る」

ヒカルと駅で別れた。

明日からヒカルの言った通り、正攻法で行ってみようと思う。

日常生活の崩壊

「おはよう！」

朝、挨拶をしても誰も返してくれなかった。一体何が…
机を見てみると、ゴミが乗せられて、机やノートには

『死ね』

『売女』

などと書かれていた。

何、これ…

言葉がなかなか出てこない…机の中には更に信じられないものがあった。

私が何人もの男の人と体を重ねてる写真…

もちろん、私はそんなしてない。合成写真だ。ひどい…なんでこんなことするの…？

「赤坂！」

真田くんが私を呼んだ。

「淫らな行為をするなど、たるんどる！！」

一方的に私は怒られていた。私はこんなことしてない。そう言いたいはずなのに、言葉が出ない。柳生くんが見たら、絶対に私を軽蔑する。嫌、嫌…

「弦一郎、今後の練習だが…」

柳くんが教室に入ってきた。もう、私はダメかもしれない。

「これは…」

柳くんが写真をまじまじと見る。フツと笑って私の方に近づいてきた。

「これは、合成写真だろ」

…そうか、柳くんは参謀って言われてるんだっけ。わかってくれる人がいてくれて安心した。

「ただ、お前を狙っているのがテニス部のファンだとすると色々

厄介になる。少しだけ距離をおくぞ。心配するな、俺は赤坂の味方だ」

そう言われて私は涙が出た。周りから見たら柳くんが罵ったと見えると思う。だけど、少なからずこの学校に信じてくれる人がいるんだ…

「弦一郎、練習の話は後です。ではな」

柳くんは教室を去った。その後に柳生くんが入ってきて写真を見つけた。

「、これは……」

写真を見た後、私を見てきた。顔を歪めている。あなたは、私の味方ですか……？

「すいません、後で話があります」

私に発した言葉は冷たかった。やっぱり、か…

私はゴミを片付け、ノートも空いてるページを利用した。

「ねえ、ねえ。話があるんだけどお…」

うちのクラスの安部早理亜が話しかけてきた。彼女は男子テニス部のマネージャー。

人気のいないところに連れて行かれた。

「どお？みんなから軽蔑された気持ち」

「安部さん、あなたが…」

「そうだよ？だって、アンタが比呂くん盗るから」

どうも安部さんは柳生くんのが好きらしい。

「だったら堂々と好きって言えいいじゃない！あなたがしてることは間違ってる！」

「うるさいなあ！アンタなんか死んじやえばいいのよ！！」

安部さんが私の頬を思い切り叩いた。痛い…もう、体も心も痛いよ…気が済んだのか、安部さんは校舎に戻って行った。

「大丈夫ですか!？」

え…そんな、はずない…

私は意識を手放した。

味方

目を覚ますと、私はベッドの上にいた。……保健室だ。

「大丈夫ですか？」

…なんで、なの

「柳生くん……」

さっきはあんなに冷たい声だったじゃない。なのに何で優しくするの？

「許してください…先程私はあなたを疑ってしまいました…」

柳生くんが頭を下げてきた。

「頭…あげて。私は怒ってないから…でも、私に近づかない方がいいよ…」

「何故ですか！安部さんが私を好きだからですか！」

そこまで知ってて…何でよ…

「知ってるなら尚更。お願い。あなたにも被害が及ぶのは嫌なの…」
理解、してくれたかな…

「わかりました。しかし、私もレディーが傷付くのを黙って見ているなんてできません。必ず貴女をお守りします」

もう…それはわかってないって言うんだよ…でも、嬉しかった。私は負けない。

「柳生くん、先に戻って。一緒に行くともまずいから」

「いえ、赤坂さんがまた倒れてしまったたりするといけませんので。

それとも、抱きかかえてお連れする方が宜しいか」

「やめてよ」

恥ずかしくなってくる。柳生くん、そんなに優しく微笑まないでよ…胸が苦しい…

「おーいたいた」

入ってきたのは丸井くんだった。

「おい、赤坂…俺たちの大事なマネを虐めたらしいじゃねえかよい」

虐めた…？　どうということ…

「サリアが泣いてたんだよ！　頬を真っ赤にしてな！！」

「あの、少し待ってください！」

柳生くんが声をあげた。

「頬を赤くしたのは赤坂さんの方です。安部さんが彼女の頬を平手打ちしたのですよ」

「比呂士、こんな時まで紳士じゃなくていいんだよ。そいつ、昨日なんか六角の天根と一緒にいたんだぜ？　そんなおとなしそうな顔して男遊びが激しいんだな」

「違う！　ヒカルは！！」

「やめてください！！」

柳生くんが机を叩いた。

「あの写真は合成写真です。赤坂さんと天根くんが恋仲であれ、関係のないこと。丸井くん、言葉を慎みたまえ！」

『恋仲であれ、関係のないこと』

やっぱり、柳生くんにとってはそうだよ…ヒカル、失恋しちゃったよ…

「もう教室行くね…ごめんね、柳生くん」

「あ、赤坂さん！」

ヒカル、千葉に帰りたい…

私は教室には行かず、屋上に向かった。屋上は立ち入り禁止だけど、鍵だけはあいてる。

「ヒカルに電話…しようかな」

でも、授業中だよ…と、思っても、電話したい。気がついたら私は通話ボタンを押していた。

……出ないよね。電話を切ろうとした瞬間、

『どうした』

ヒカルが出てくれた。

「ヒカル…？　授業は……」

『誰かさんの所為で抜けてきた。で、どうしたんだ』

「ヒカ、ルウ……」

堪えられなくて泣き出してしまった。

『何があったんだ!』

少し落ち着いてから私はこれまでのことを話した。

『そうか。結衣にジェラシーを感じている奴が手を出してきたのか』

「ねえ、ダジャレ言つてよ。ちよつとは気分良くなるかも」

『…ジジイが食つてもババロア……ブツ』

「ふ、あはは」

いつもなら笑えないダジャレだけど、今日は笑える。

「ありがとう。わざわざ授業まで抜けてくれて」

『あとでバネさんたちにも言っておく。心配するな。それと、諦めるな』

諦めるな…? それは何に対して? 虐め? 柳生くん?
聞こうとした瞬間に、ドアが開いた。

「赤坂さん、こんなところにいましたか…」

振り返ると柳生くんがいた。……違う。

「どうしたの、仁王くん」

「私は仁王くんではありませんよ。なかなか教室に戻ってこないの
で心配しましたよ」

「じゃあ、もう戻るよ。先に行ってるね」

横を通り抜けようとしたが、腕を掴まれた。

「折角二人になれたんですから、少しだけここにいきましょう」

「嫌! 離してよ、仁王くん!!」

「…なんでお前さんにはバレるんじゃないか。まあエエわ。逃がさん
よ、赤坂…」

仁王くんに押し倒されてしまった。抵抗しても男と女の力の差は圧倒的。敵うはずがない。

「誰か、助けて!!」

私の服を脱がしていく。助けて、柳生くん…ヒカル…
「やめなさい!!」

六角中の集合

そこにいたのは息を切らした柳生くんだった。

「仁王くん、赤坂さんから離れなさい」

「断る。……って言ったらどうする？」

「何が目的ですか」

「興味が湧いての。どんな奴か試したんじゃ」

私は必死に逃れようとする。でも、ビクとも動かない。

「助けて…柳生くん…怖いよ…」

「仁王くん、本当に怒りますよ…」

その時に見えた柳生くんの瞳は鋭かった。

「はいはい、紳士がキレると怖いからの」

私はやっと、仁王くんから解放された。

「大丈夫ですか？」

柳生くんが近寄ってきた。

「大丈夫だよ。未遂だから。じゃあ、先に行ってるね」

私は逃げるように屋上を去った。

気がつけばもうお昼だった。もう私は誰とも一緒に食べることができない。つらいよ…

「赤坂」

この声は……

「柳くん…」

柳くんは何も言わずに私の腕を掴み、歩き出した。

「ちょ、どこに行くの？」

「……」

答えてくれない。どうして…

人気のないところに連れて行かれた。

「何でこんなところに…」

「ここはあまり人が来ないんだ。一緒に食べるならここの方が良

い」

柳くんは気を使ってくれたんだ：

「しかし、何故お前が虐められるんだ」

「……わからない」

私はあえて訳を言わなかった。虐めの中心になってる人を言えば、柳くんは対応してくれると思う。だけど、彼女はテニス部のマネージャー。輪を乱すわけには：

「と、言っても、原因は分かっているがな」

「え……」

「ちょ、ダビデ、見つかったちゃうよ」

「バネさんが背中を押してるんだ」

「俺はお前にさえ触れてねえ！」

：聞き覚えのある声だ。

「ヒカル、ということなの」

「：ギクッ」

草の陰から出てきたのは：六角中のみんなだった。

「学校はどうしたの！」

「今日は午前授業なんだよ」

佐伯くんが答えた。

「みんな結衣のことが心配なんだ」

黒羽くんが私の頭を撫でてきた。

「：ありがとう」

「赤坂、話を割ってすまないが六角とはどういう関係なんだ」

柳くんがわからない、と言う顔をした。

六角中の集合2

「私ね、小学5年まで千葉に住んでたの。その時によく遊んでたんだ。特にこのオヤジと」

オヤジと指したのはヒカル。

「な、なぜ俺がオヤジなんだ」

「くだらないダジャレばかり。しかも寒いし」

「ダジャレは脳の活性化にはいいんだぞ」

もう少し笑えるダジャレだったら文句言わないけど：

「なるほど、だから昨日も一緒にいたのか。赤坂、知っていると思うがお前と天根が付き合っていると噂になっている。」

「そうだよね：丸井くんにも似たようなこと言われたよ。って、六角は午前授業かもしれないけど、立海はまだ授業あるんだから来ちゃ駄目だって。ヒカル、鍵渡しておくから家で待ってて」

「うい。相変わらず結衣のお父さんは忙しいのか」

「うん：今日も帰ってこないし。最近は事件が多くて大変みたい」

「赤坂の父親は警察官、なのか？」

「そうだよ。ついでに言えば叔父も警察官なの」

柳くんは目を見開いてた。まあ、私も言わなかったしね。

「じゃ、結衣の家で待ってるのね」

「うん、またあとでね。柳くん、行こ」

「あ、ああ」

みんなといったん別れ、私達は教室に戻った。

「柳くん、今日部活だよね」

「言いたいことはわかってる。安部を監視して、だろう」

「ありがとう。私も頑張るからね！」

柳くんは自分のクラスに戻って行った。あなたが味方だと幾分心強いよ。

「赤坂！！」

怒鳴りこんできたのは真田君だった。それだけじゃなくて私の胸倉を掴んできた。

「貴様、安部にも手を出したようだな」

と、私の頬を平手打ちしてきた。……平手打ちなだけマシなのかな。

「真田くん！女性に手をあげるなんて男として…」

「柳生、こいつを庇うのか」

「彼女が安部さんにそんな行為をするとは思えません！証拠もない。彼女を疑うのはやめて下さい！」

「もう、いいよ。別に、気にしてない」

頬が痛い。でも、心の方がもっと痛い。柳生くんが守ってくれてるのはうれしいけど、それは同情なんだよね。思ってくれとは言わないよ。今でも十分嬉しい。何でだろ…心の中が空っぽって思うのは…

「授業始まるよ？席に着いた方がいいよ」

泣きたくない。もうかなしい顔はしたくない。周りにも迷惑だし、母さんにも…母さんだって病氣と闘ってるのに…

…少し席をはずしただけなのに机の中にゴミがたくさんつまめられてる…教科書もなくなってる。また授業放棄しちやおうか…

「見せてあげるよ」

隣の席の有加里ちゃんが見せてくれた。

「…いいの？私に関わって」

有加里ちゃんてさえ私を軽蔑したはず。

「なんかね、柳生くんが言った通り、証拠もなく疑うのは良くないかなって。あの写真もさ、柳くんから聞いたんだけど合成だったんだよね。それに、安部の言うことは信じないって決めてるし」

「……ありがとう」

友達が戻ってきた。…柳生くんには感謝しないとね…

とりあえず、私は授業中苦労はしなかった。

授業が終わり、私は早々と帰ろうとした。

「ええ、もう帰っちゃうのお」

この変な喋り方は安部さんしかない。

「ごめんね。今日は忙しいの。じゃあね！」

私は走って去った。……どうしようかな。お父さんに柔道教えてもらおうかな。

なんとか学校を出れた。あとは家に帰るだけ。

「…お嬢さん、ちよつとええか？」

眼鏡をかけた関西弁の人に話しかけられた。

「ほら、こっちきいや」

「え、ちよ…」

腕を引っ張られ、耳元で

「お嬢さん…後つけられとるで」

「えっ」

「俺と一緒に居れば安心やで。俺、氷帝学園3年忍足侑士や」
初めて会うのに安心とはどういうことなんだろう…

「何で氷帝の天才がいるんだよ」

「知らねえよ！畜生！」

「そこのお二人さん、何しとるん？」

「あっ…」

忍足さんの言うとおりの、私は尾行されてた。

「アカンで？ストーカーみたいな真似したら…」

「もういいですって！忍足さん、ありがとうございます」

「あ、自分待ってえな。俺も話があんねんって」

「なんですか」

「ちよい待ち。敬語は止めよか。同い年なんやから」

え、同い年だったの！？てっきり高校生かと…

「あの、家に千葉から来た友達が待ってるの。あなたも良ければ来ない？」

さっきの行動で悪い人ではないことがわかったし、家には黒羽くんたちがいるから何かあったら助けてくれるよね。
彼を家に入れることにした。

ころ

「ただいま」

「おかえり…って、なんで忍足がいるんだい？」

出迎えてくれたのは佐伯くんだった。

「六角の佐伯か…千葉から来た友達って佐伯やったんか」

「他にもいるけど…あれ、知り合いなんだ」

「俺もテニス部やからなあ」

そうだったんだ。じゃあみんな知ってるわけだよね。

「とりあえず、私の部屋に行こ」

ずっとここにいる訳にもいかないし。

「お邪魔します」

「どうぞ。そっか、忍足さんって氷帝のテニス部なんだ…」

「あんなあ…同級生なんやからさんはやめへん？」

「わかった。忍足くん…でいいかな？」

「ん、おおきにな」

「あ、結衣おかえり…って、何で忍足がいるんだよ」

部屋に入って黒羽くんが忍足くんが何でいるのかと聞いてきた。

「俺も話があんねん。それが終わったら帰るから安心しいや」

「そうだ、話って？」

そういうと、忍足くんの顔つきが変わった。

「お嬢さん…赤坂結衣ちゃんやろ？実はな、氷帝にも噂が広がってるんや。それにな、立海のマネージャーの安部…ウチの穴戸のいとこやねん。やけど穴戸はあいつの本性はわからへんみたいなんや。猫被りなどこあるやろ」

「でも、どうして忍足くんはわかったの？安部さん、そんな姿見せないと思うけど…」

「…勘、やな。それに、結衣ちゃんがそないなことやるとも思えへんしな」

一瞬だけど、忍足くんの表情が曇った。

「そういえば忍足さん。今日部活はなかったんですか」

ヒカルが忍足くんに問いかけた。そういえば…氷帝も強豪校だし…

「部活な…仮病使うてサボったわ」

「忍足、わざわざサボってきたのか!？」

「当たり前やん。結衣ちゃんを助けるためなら部活なんてなんぼでもサボったるよ」

…私は心底から嬉しかった。あまり話したこともないのに、私を信じてくれるなんて…

「あん時のお礼や…」

忍足くんがボソッと呟いた。あの時のお礼……？

「何？」

「なんでもあらへんよ。ほな、もうお暇しとくわ」

「あ、待って。アドレスと番号教えて」

色々情報を聞かないと…青学は…柳くんが知ってるよね。たしか、乾くんと幼馴染だって聞いたし。

「ええよ」

忍足くんとアドレスと番号を交換した。…今日、忍足くんに会えてよかった。

「暗くなってしもたなあ…」

「駅まで送るよ」

「あゝ結衣ちゃんみたいにつけてくるやつはおらへんから平気や」
…確かに。

「今日はありがとう。また今度ね」

忍足くんは微笑みながら、またな、と言って帰って行った。

「忍足さんって結構いい人なんですね」

「葵くん、忍足くんってどういう人なの？」

「氷帝の天才って言われてるのね」

氷帝の天才か…立海のみんなに言ったらわかるのかな…

「よし。ご飯食べて行くでしょ？」

「いいのかい？」

「うん。こっちまで来てくれたお礼だよ」
と、私はカレーを作り始める。

「結衣さん手伝いますよ」

葵くんが手伝ってくれた。手伝ってくれたおかげで思ったより早く作ることができた。そしてみんなで仲良くご飯。

「葵くん、ありがとう」

「いえいえ。……やっぱり、結衣さんの笑顔が一番好きだ……」
え……

「結衣さんの笑顔、元気が出るんですよ。綺麗な笑顔だし……」
綺麗……なんだ……もうくすんでるかと思った……

「剣太郎、結衣を口説くのは無理だぞ」

「ダビデだって狙ってるんでしょ」

「そうだ。……と、言ったらどうする」
ええええっ!?

「ジョーダンだ。結衣は妹みたいな存在だ」
ん? おかしくない?

「ちょ、私の方が年上だよ。妹はおかしくない!？」

「マツチヨは黙っちよれ……ブツ」

「黒羽くん……」

「おう」

私達は構えた。ヒカルは察したのか顔を真っ青にしていた。

「ちょ、結衣! バネさん! タンマ……」

「問答無用!……!」

綺麗なアップパーがヒカルにクリーンヒットした。

私と黒羽くんはガッツポーズして、佐伯ちゃんと葵くん、亮くんは大爆笑してて、樹くんがヒカルの心配をしてた。ヒカルは……気絶してるのかな。

「さて、もう帰るか」

「そうだね。もう暗くなってきたるし」

「じゃあね。結衣」

「へ？これは持って帰らないの？」

これとはまだ気絶してるヒカルのこと。

「あゝ結構重いからな。結衣、管理頼んだ」

黒羽くん：管理って、なんなの？

みんなは帰って行った。ただ一人を除いて。

「ヒカルゝいい加減起きてよゝ」

「う……」

ヒカルが起きた！

「ヒカル、もうみんな帰っちゃったよ。早く追いかけなよ」

「……帰るのめんどくせえ……泊めて」

……はあ！？

「明日千葉まで行くの？遅れるよ」

「少しくらい……問題ない」

ヒカルは頑固だから何言っても無駄なんだよね。仕方ない……

「じゃあ先にお風呂入ってくるね。寝ちゃだめだよ」

「うい」

私は着替えを持って脱衣所に向かう。……ヒカルが泊まるなんて久しぶりだな……

今日は心が物凄く温まった。忍足くん……六角のみんな、柳くん、有加里ちゃん……柳生くんは、どうだろう……やっぱり、諦められないなあ……柳生くんのこと……安部さんが何を言おうと、私は気持ちを伝えるまで諦めないよ……

お風呂から出て、ヒカルに早く入るように伝えた。ヒカルはなんだか寝むそうだった。

……そういえば、布団どうしよう……

「風呂から出たぞ。……俺はソファで寝るから」

「……ヒカル、一緒の布団に入らない？」

……小さい頃はよく寝てたし。

「変なことするなよ」

「ヒカルこそね」

私達は全然気にせず眠りについた。

好きな人

朝、私は6時に起きた。隣を見るとヒカルはまだ寝てた。

「ヒカル、ただでさえ間に合わないんだから早く起きて」

「…そうだ。ここ、結衣の家だった」

やっとヒカルも目が覚めて私達は着替えた。もちろん別々の部屋で。

「ご飯作らなきゃ…」

「手伝う」

…珍しい。ヒカルが家事の手伝いをするなんて。

朝というのもあって、簡単なものしか作らなかった。

「私は大丈夫だけど、あなたは遅刻なんだからね」

「わかってるって。ごちそうさま。さて、もう行くか」

「途中まで一緒に行く?」

「…気持ちは嬉しい。だけど、今のお前の状況を考えたら一緒に行けない。じゃあ、またな」

ヒカルは早々と家を出て行った。

私は10分くらい遅れて家を出た。

「赤坂さん、おはようございます」

…行く途中で会うとは思わなかったよ。

「おはよう、柳生くん」

私…ちゃんと笑えたかな。

「それにしても…朝練はないの?」

「…今日は休んだのです」

柳生くんは困ったような顔をしていた。

「赤坂さんとお話がしたかったんです」

「わ、私と…?」

話ってなんだろう…

「まず、天根くんのことです。あなたと天根くんは…どういった関係なのですか?」

「ヒカルとは幼馴染だよ。私、小さい頃千葉にいたから」

「そう、だったのですか。：昨日は申し訳ありませんでした。あのようない方をしてしまって：」

「：大丈夫。あ、あと離れて歩いて。柳生くんを巻き込みたくないの」

私はわざと突き放すような言い方をした。

「：いえ。私があなたを必ずお守りすると言ったはずです。私にはあなたの嘘は通用しませんよ」

：言葉が出なかった。ただ、言葉に出せないけど、ありがとう：柳生くん：

話しているうちに学校に着いた。：また嫌がらせされるんだ。

「比呂くくん！」

この声を聞いただけで私の手は震えてしまう：怖い、怖いよ…

「おはようございます、安部さん」

「もおくサリアで良いって。：あれ、赤坂さん：？」

「……おはよう、安部さん。柳生くん、もう私先に行くね」

校舎に行こうとした瞬間、柳生くんは腕を引っ張られた。

「柳生く……っ!？」

もちろんバランスを崩し、柳生くんの腕の中にいる状態だった。

「おや、すみません。腕を掴んだだけで倒れるとは思っていなかったので：」

：絶対嘘だ。柳生くんは引っ張ったんだ。柳生くんの顔を見るといつもの柳生くんとは想像もできないような表情だった。紳士といえど、中学生なんだな、とよくわかる。いたずらをした子供のような顔してた。安部さんは私が言うのもなんだけど、醜い顔をしてた。

「柳生くん：そろそろ離してくれないかな…？」

そういうと柳生くんは腕を離れた。

「：柳生くんにも私がみんなに話してないこと、教えてあげるね：もう誤解されたくないし」

「：ありがとうございます」

とりあえず私は昨日のことを話した。忍足くんからの情報など…

「なるほど…そういうことが…安部さんが穴戸くんのいとこ…ですか。忍足くんも優しいですね。東京からわざわざ…」

なんだろう…忍足くんとは…初めて会った気がしない…思い出せないな…

教室に行くと、また新しいものが机の中に入っていた。

「……今度は忍足くんか…」

男遊びに追加されていた。まったく…忍足くんが迷惑するって考えないのかな…

「赤坂さぁん、話があるんだけどおもう語尾を伸ばすの止めないかな…」

「赤坂さん…」

柳生くんが心配そうな顔をする。

「大丈夫だよ。じゃ、行ってくる」

私は安部さんについて行った。

過去の記憶

人気のない場所まで来て安部さんは話しだした。

「侑くんはどう知り合ったのよ!!」

…侑くん…?

『あれ?あなた、どうしたの?』

小学3年の時だったかな…すぐに引越した男の子がいた。私はそんなに話したことなかったけど、その時だけ話したんだよね…

『…友達とまた離れるんや…せっかく仲良おなったのにな…』

その男の子は膝を抱えてた。

『…あなた、名前は?』

『侑士…自分は?』

『私、赤坂結衣。侑くん…もしまた会えたら一緒に遊ぼうね!』

侑くん…関西弁…:だとするとあの時の侑くんは忍足くん…?

「何私を無視してんのよ!!」

安部さんの声で我に返った。

「あっちにいるの、弦一郎だよね」

指をさした方向を見ると真田くんがいた。

「いや…やめてえ!」

しまった…:私をまた嵌めるのが目的だったんだ…真田くんも気付いて、こっちに向かってくる。

「安部!何があったのだ!」

「弦一郎お…:ううん、大したことじゃないの…」

「…:安部。先に戻っていてくれ」

「うん…:」

真田くんは安部さんを帰らせた。そっちの方がいい。

「貴様…:安部に何をした…」

「何もしてない」

「あんなに震えていたのだぞ!」

それが何の証拠になるの…？

「貴様の毒牙に柳生はやられてしまったようだな…またあのような行為をしたのだろう」

「私はそんな事してない！」

「柳生の目も覚めさせなくては…」

真田くんのことだから柳生くんを殴るんだ…そんな事はさせない。

「柳生くんには何もしないで！！」

私は真田くんの腕を掴んだ。

「ええい、離さんか！！」

真田くんがおもいきり腕を振り払う。そのはずみで私は頭を打ってしまった。

「うっ……」

真田くんはそのまま行ってしまった。あ…意識が遠のいてく…

「赤坂！？しっかりしろ！」

誰かの声を聞いた。だけど誰なのか認識することなく意識を手放した。

『結衣は本当に綺麗な笑顔をするわね…母さんは結衣の笑顔で元気になるわ』

『ホント！？じゃあずっと笑ってるね！』

懐かしいな…小さい頃の記憶だ…

「ん……」

私は目を覚ましてあたりを見回してみた。…また保健室だ…誰が私をここまで運んでくれたんだろ…

「大丈夫か？」

「！！」

私は震えが止まらなかった。声をかけてきたのは仁王くんだった。

「あん時は悪かったの。ちよいと試させてもらった」

服を脱がしてまで何を試したというのだろう…

「まだ痛むか？」

仁王くんが心配そうな顔をした。…本当にこの人がわからない。掴

めない人…

「大丈夫…仁王くんが運んでくれたんだよね。ありがとう」

「いや…礼は言うな。…真田も酷いことするねえ。女子に手をあげるとは…」

…仁王くんと柳生くんって似てる。おんなじセリフを言ってるもん。

「さて、もう戻ろうかな」

「お前さん、寝てなくてええんか？」

「うん。もう大丈夫だよ」

結果的には授業をサボっちゃったけどね…

仁王くんが教室まで付き添ってくれた。思ったより優しい人だった。

「どこに行っていたのですか？」

「えっと、保健室にいたの」

今言わない方がいいよね…今日は…母さんのお見舞いに行こうかな…

「…また彼ですか…申し訳ない」

柳生くんは言わなくてもわかってしまったようだ。

「謝る必要はないよ。大体、マネージャーを信じるのは当たり前だし」

でも…私の味方が意外と多かったな…

「あと…学校にいる時は私のそばから離れないでください。またあなたに何かあったら大変ですので」

「……うん。わかった」

「ゆーい！何してんの！」

後ろから抱きついてきたのは有加里ちゃんだった。

「有加里ちゃん…何もしてないよ」

「柳生くん、結衣のことしっかり守ってよ！」

「もちろんです」

恥ずかしい…あ、もうご飯の時間か…

「赤坂」

「柳くん。一緒に食べようか」

またいつもの場所で昼食を食べる。ただ二人追加されてるけど。

「まさか柳くんも味方だとは…」

「ふっ、俺を誰だと思っている」

「結衣、卵焼きちよーだい」

「あ、いいよって言ってないよ！」

楽しいな…私の日常が戻りつつある。

「今日は幸村君のお見舞い…でしたっけ」

「ああ」

幸村くん…テニス部の部長か…あまり会ったことないなあ…1、2年のおきもクラス違ったし。

話していると時間が過ぎるのは早く感じる。もうお昼休み終わりだ。

「では柳くん。後ほど」

「ああ。今度はサボるなよ」

私達は教室に戻り午後の授業を受けた。

お見舞い

授業が終わり、病院へと向かった。母さん…元気かな…
母さんの病室の前に立つと、幼い子どもの声が聞こえる。

「結衣、入ってきなさいな」

まだノックもしてないのに母さんは私がいることに気付いたみたいだった。

「お邪魔します…」

子どもたちの手に持っているのは絵本だった。母さんが読んだのかな…

「じゃ、せーいちくんの所に行ってくるー」

「走らないでゆっくりいきなさい」

子どもたちは病室を出て行った。

「そうそう、この病院に立海の幸村くんが入院してるのよ」

「幸村くんもここの病院なんだ…」

コンコンつとノックの音が聞こえた。

「失礼します」

入ってきたのは今話していた幸村くんだった。

「立海の制服…てことは」

「私の娘よ」

「弥生さんから色々聞いてるよ。俺は幸村精市。結衣ちゃんだよね」
幸村くんって、あらためて見ると綺麗な顔立ちしてるなあ…

「私の事は良いから幸村くんの病室に行ってきなさい」

「わかった。また来るね」

母さんの病室をあとにし、幸村くんの病室に向かった。中に入るとさつき母さんの所にいた子どもたちがいた。

「せーいちくん、どこ行ってたんだよー」

「ごめん。ちょうど入れ違ったみたいなんだ。ちょっとこのお姉ちゃん」と話があるから遊んであげられないんだ。ここで遊ぶのは構わ

ないからさ」

子どもたちはえーと言いながらも遊んでいる。

「結衣ちゃん：俺と君は今日初めて話すけど、俺には分かる。君、いじめを受けてるね？」

幸村くんのまっすぐな瞳に射止められた。：私ってそんなにわかりやすいのかな：

「腕、アザが残ってる。ただの打撲じゃないよね」

「……」

私は何も言わなかった。テニス部にやられたなんて言えない：

「暗い話になっちゃったかな。ごめんね。違う話をしようか」

それから私達はいろんな話をした。母さんのこととか、テニス部のこととか：テニス部の話をしてる時の幸村くんの顔：本当に楽しそうだった。

「幸村、見舞いに来たのだが：」

真田くんが入ってきた。私がいることを確認すると真田くんは私を睨みつけた。

「貴様、幸村に何をしている」

子どもたちは危険を察したのか、病室を出て行った。

「何もしてないよ。じゃあね、幸村くん」

「結衣ちゃん！また来てね」

：ありがとう。幸村くん：私は病室を出た。これからどこに行こうかな：

携帯が鳴った。：忍足くんだ。

「もしもし」

『結衣ちゃんか？』

「：侑くん」

私はそう呼んでみた。彼は：あの時の侑くんなのかな：

『思い出したんやな。嬉しいわ』

電話越しでもわかる。本当にうれしそうだった。

「侑くん、ゴメンね：私から約束したのに：」

『そんな泣きそうな声せんといて。悲しゅうなる』

柳生くんたちが歩いているのを見た。：きつと幸村くんのお見舞いだよね。

私は見つからないように帰った。

「：あのさ、侑くんって呼んでも大丈夫？」

『おお。もちろんやで。あ、用件言うで。氷帝の味方は俺、跡部日吉や。：岳人にも説得したんやけど無駄やった』

「：ありがと。十分だよ」

侑くんは優しいな：

『オイッ！忍足、テメエ：レギュラーから落とされてえのか！』

『あ、跡部：堪忍してえな。今大事な話してんねんから』

：内緒で連絡取ってたのか：それもそうだよ。今部活中のはずだし。

『赤坂つてのはお前か？』

跡部くんが話しかけてきた。：侑くん、電話盗られたんだね：

「はい。跡部くんだよ。ごめんね、部活中なのに：」

『それはコイツが悪いから気にするな。俺は氷帝の奴らがお前に危害を加えないように見張っておく。：お前も頑張れよ』

「ありがと。私も負けないから！」

電話を切り、私は訳もなく公園に向かった。

公園で…

さて…これから何をしようかな。

「結衣、こんなところで何をしてるんだ？」

振り向くと警察の制服を着ている父さんがいた。

「父さん。母さんのお見舞いの帰りだよ」

「そうか…弥生は元気だったか？」

それから私たちは少し他愛のない話をしてた。

「次の日曜には帰るからな」

「うん。楽しみにしてるよ」

父さんと別れた。

「あれれ？誰かと思ったら赤坂さんじゃないッスか」

目の前に現れたのは切原赤也くんだった。

「病院に行かないの？」

「なんでアンタが知ってんの。ほんとムカつくよなあ…」

やはり、安部さんの味方か…

「ちょっと遊んでくか」

切原くんが腕を掴んだ。それも、力強く。

「痛い！離して！」

「坊主、離したりいや」

女の人が切原くんの腕を掴む。

「…なんすか。女だからって容赦しねえッスよ」

切原くんの目が赤く染まった。

「止めとき。坊主じゃ勝てへんよ」

切原くんが女の人に殴り掛かった。女の方は避け、足を掛ける。切

原くんは転んだ。

「さっさと行きいや。クソ坊主」

「チッ…」

切原くんは走り去った。

「大丈夫か？」

女の人は私の様子を伺ってきた。よく見ると薄く化粧をしていて、綺麗な人だった。

「ウチは真智子。…弥生さんの娘さん、やろ？」

「なんで母さんの名前…」

「よお世話になってな。結衣ちゃん、なんやさっきの」

私はこれまでの事を話した。…初めて会った人にいいのかな…

「その女、ほんま有り得んな。弥生さんは知っとるん？」

「言っていないから知らないと思います…」

知られたくない…母さんを悲しませる事は絶対にしたくないもの…

「相談ならいつでももので。ほなこれ、連絡先や」

マチコさんが渡してきたのは携帯の番号とアドレスが書かれている紙だった。

「またさっきのみたいに襲われたら怖いから送ったるよ」

「大丈夫ですよ」

さすがに悪いと思って遠慮する。

「何かあってからやと遅いんや。ウチは襲わへんから安心しい」

「……はい。ありがとうございます」

マチコさんの押しに負けてしまった…

帰宅

マチコさんは家まで送ってくれた。……家の前に誰がいる……

「侑くん……？」

「結衣ちゃん、おかえり……げっ」

「げっ、はないやろ。侑士」

あれ……二人は知り合いだったの？

「マチコさんは地元でかなり有名やで。近所やったから尚更怖かったわ……」

「そこまでやないって。レディースにおったからって強いとは限らんしな」

レディー……ス……？

「マチコさん、無自覚すぎやって。で、結衣ちゃん、なしてマチコさんとおるん？」

「カワエエ娘がおったんでナンパしたんや。侑士の彼女か？」

マチコさんは笑いながらそう言った。

「ちゃいますよ。たしかにカワエエし、彼女にしたいけど……」

「侑くん、私可愛くなんかないよ」

「無自覚な娘なんやな……」

可愛い、とマチコさんは私の頭を撫でた。

「立ち話もなんだし、上がります？」

「ええの？あ、侑士はアカンで。何するかわかれへん」

「アホ言わんといて下さいよ。何もしませんって」

関西の人って、冗談が面白いなあ……どっかの誰かさんのダジャレとは大違い。

二人を家に招いた。

家で何する訳でもなく、世間話をしていた。

「結衣ちゃんは彼氏とかいてへんの？」

「いないですよ」

「好きなやつはおるやろ？」

……答えるべきかな？

「おっても言えへんやろ…結衣ちゃん、言わんでええよ」
二人に詰め寄れ、戸惑う。と、ここで電話が鳴った。……誰の番号かな。

「失礼します！もしもし？」

「もしもし、柳生です」

え…なんで知ってるの？

「すみません、野崎さんから教えてもらったのですが…」
有加里ちゃん、聞いてないよ…

「うん…大丈夫。どうしたの？」

「切原くん、何かされませんでしたか？」

「っ、どうして？」

「切原くんがずっとあなたの事を言っていたものですから…」

…柳生くんは今どこにいるのかな…

「今どこにいるの？」

「本屋の前ですよ。赤坂さんは…」

「家だよ。侑くん…忍足くんと母さんの知り合いの方が来てる」

「……そうですか」

柳生くんの声が低くなった。何か悪い事言ったかな…

「柳生くんも来る？本屋まで行くよ」

「折角ですが、遠慮しておきます。ではまた連絡します」

……なんだろ、柳生くん機嫌悪いなあ…

「へえ、結衣ちゃんはその『柳生くん』が好きなんやな」

「えっ、あ……」

「残念やなあ、侑士」

マチコさんは侑くんの肩を叩いた。

「最初っからわかつたわ。結衣ちゃん、俺帰るわ」

侑くんが立ち上がった時、誰かが来た。

誰かな……

「はい、どちらさまですか？」

「急にすまねえな。跡部だ」

跡部くん！？なんで家知ってるの！？

「あ……GPSで調べたな……まったく、プライバシーの侵害や……」
隣にいた侑くんは携帯を握り締めていた。

とりあえず、玄関に行き、跡部くんと会った。

「赤坂か。はじめましてでいいのか？」

「顔をあわせるのは初めてだからね」

「跡部、なんで来たん？」

「わざわざ迎えに来てやったんだ。感謝しな」

「侑士、帰るんか？」

「マチコさんも帰りますか？」

「ウチも帰るわ。息子が待つとるし」

えっ！？マチコさん子どもいるの！？

「結衣ちゃん、そんな驚かんでも……ウチは36やで？17の息子が
おるよ」

見えない……全然若く見えるよ……

「あなたも乗っていきますか？」

「跡部くん言うたか……お言葉に甘えよか」

「結衣ちゃん、お騒がせしてすまん。またな」

3人は帰った。さっきまで賑やかだったのに、今はもぬけの殻だ。

「暇になっちゃったな……」

どうしよう……ちよつと散歩でもしようかな。

私は外に出て、行き先もなく歩いていた。

散歩

散歩をすると気分もよくなるなあ…

「あらあ、赤坂さあん」

嫌な人に会ってしまった…

「こんにちは。安部さん」

「比呂くん、いい加減諦めなよ」

そんな事、言われる筋合いはない…

「……」

もう話すのも疲れる。無視して通り過ぎようとしたら腕を掴まれた。安部さんの長い爪が食い込んで痛い…

「無視しないでよお。話は終わってないでしょ」

「諦めるなんて、人に言われることじゃない…」

「何、アンタ…ムカつく」

平手打ちを喰らい、後ろによろけた。誰か後ろにいたらしく、ぶつかってしまった。

「大丈夫ですか？」

この声…柳生くん…

振り返ると、柳生くんがそっと私の肩を掴んだ。

「比呂くん…？何、で…」

「この道を通ってはいけませんか？」

「そうじゃ、ないけど…」

安部さんが動揺してる…

そうだよね…見られたんだからね…

「頬が赤いですね…早く冷やさなければ…」

柳生くんの冷たい手が叩かれた頬に触れた。

「や…大丈夫だから…」

「っ…」

安部さんは走って去ってしまった。

「で…何を諦められないのですか？」

「え……」

聞いてた…どこから聞いてたんだろ…

「あの、大したことじゃ…」

「私には言えない事ですか」

柳生くんの顔が近い…顔が熱くなるのがわかった。

「柳生くんを…好きでいること…」

私は恥ずかしくて目をつぶった。その時、唇に柔らかい感触が当たった。

びっくりして私は目を開けた。そこには柳生くんの顔が間近にあった。

「諦めないのは正解ですね、結衣」

「わっ、私の名前…」

「私とお付き合いしましょう」

「え、え…」

私の頭の中はパニック状態だった。何、柳生くん…私にキス、した………？

「困らせるつもりはなかったんですが…」

「冗談…柳生くんも言うんだ…」

「…私は冗談でもそんな軽いことはしません。どうしたら信じてもらえるのでしょうか」

「ダメ、だよ…」

「何がダメなんです？お互い好き合っているのに」

「だって、真田くんとかに白い目で見られるかもしれないよ」

彼は私のことをとことん嫌っている。

「まわりを考えないで、あなた自身はどうなんですか？私が誰を好きになろうと関係のないことですから。もう一度言います。私とお付き合いして下さい」

柳生くんの目は本気そのものだった。私自身は柳生くんと付き合いたいよ…

「…柳生くんありがとう…あなたには、大変な思いをさせるけど…それでもよければ…」

付き合ってください。と言う前に抱きしめられた。

「おーおー、紳士が公共の場でそんなことしてええんかのう」

ハッとして見ると、仁王くんがニヤニヤしながら話しかけてきた。

「…仁王くんですか。…どうやら好きな女性の前では紳士でいられないみたいです」

普通に言ってしまう柳生くんがすごいと思う。

「あん時本当にヤツとけばよかったの…」

「そんな事したら本気で絶交しますよ。結衣、行きましょう」

私は腕を引っ張られ、とある場所に向かった。

「柳生くん、どこに行くの？」

「…まず、呼び方から変えて頂きますか…苗字ではなく、名前で呼んで下さい」

「え…いきなりなんて無理だよ…」

「名前を呼ばないと…キスしますよ」

「脅しじゃない…」

「天根くんは下の名前なのに、私は苗字なんてフェアではないですよ」

ヒカルの場合は小さい頃からだから仕方ないじゃない…

「比呂、士……」

名前を言った途端、キスされた。

「ずるい！」

「ご褒美ですよ」

柳生…いや、比呂士がこんなに子供っぽいなんて、知らなかった…

「先程の質問ですが、向かっているのは私の家です」

急にすごいことになっちゃったな……

二人

一気に距離が縮まった気がする。でも、家に行くなんて…
考えてるうちに、比呂士の家に着いたみたい。

…すごい立派な家…

「何立ち止まっているんです？」

「あ…立派な家だなんて…」

「仁王くんも同じ事を言っていましたよ」

だって、大きいもん…

比呂士は鞆から鍵を取り出した。

「…お家の人いないの？」

「共働きですから」

なんか…緊張するよ…ヒカルの家なら普通に入れるのに…

「ほら、あがって下さい」

「う、うん…」

オロオロしながらも比呂士の家に入った。

比呂士が部屋に案内してくれた。

綺麗にしてあるなあ…性格が出てる。

「何もなくてすみません」

「ううん。聞きたいことがあるんだけど…」

「なんですか？」

「いつから、私のこと好きだったの？」

これは聞いておきたかった。

「2年の時からですよ。あなたを見て一目惚れしたんです」

「そうだったんだ…」

私は3年になってからだった。比呂士の優しさに惚れた。

「結衣はいつからなんです？」

「私は3年から。なんか…申し訳ないね、気付かなくて」

「結果的には恋仲になれたのですから、いいじゃないですか」

報告、しておこうかな…有加里ちゃんとか、ヒカルに…

「柳生く…あ」

やばい…慣れてないから苗字を言っちゃった…

「慣れてほしいですね…」

「ごめんなさい…」

私は悪い気がして俯いた。比呂士に顎を持ち上げられ、見つめ合う形になった。…眼鏡、外してる…

「結衣……」

口づけを交わす。今度は結構深い…

「ん、う…」

苦しい…酸素が…

私は比呂士の胸を叩いた。すると、名残惜しそうに唇を離した。

「嫌でしたか……？」

私は首を横に振った。肩で息してるから、それが精一杯だった。

苦しかったけど、嫌じゃなかった。

「結衣…続きをしても宜しいですか…？」

耳元で囁かれた。続きって何……？

「ああ…私が限界です。すみません…」

比呂士は私を押し倒した。

「本当に……するの…？」

「ええ。そのつもりですよ」

私は比呂士の熱を感じながら過ごした。

「比呂士の中に獣がいたなんて…」

「まあ、私も男ですからね」

なんかいつも冷静で私は悔しい思いになった。

「あれが合成写真だというのがよくわかります。実際はもっと美しい体でしたし」

「言わないで!!」

恥ずかしい。嫌な訳じゃないけど恥ずかしい。本当に紳士なの…?

「しかし、お互い初めてなのに、激しかったですね…」

「初めて……?」

慣れてる感じだったのに…比呂士も初めてだったの…?

「意外そうな顔をしていますね…」

「余裕があったから…」

「余裕があったらもっと考えて行動します。あなただから、余裕がなかったんですよ」

と、ここで比呂士の携帯が鳴った。

「出ないの?」

「あなたがいるのに、電話になんて出られませんよ」

「私の事はいいから、出なよ」

「…失礼します」

なんか、いつもの紳士的な比呂士に戻ったな…

「もしもし」

『俺じゃけど』

「…仁王くんですか」

電話の相手は仁王くんみたい。声のトーンが下がった気がする。

『そんな不機嫌になるなって』

「用がないのなら切りますよ」

『待って。親友からお祝いの言葉くらい、贈らせろよ』

「…まあ、有り難く頂きます」

『赤坂の体、華奢なんだから激しくやるんじゃないかよ』

「……………」

『もしかしたら、ちっと遅かったかもしれないがのう。じゃ、またな』
電話が終わり、比呂士はため息をついた。

「彼はよくわからない人だ…」

「でも、唯一理解してる友人が比呂士なんですよ？」

「どうでしょうね…そうだと嬉しいですが…」

私は比呂士の一番の理解者になりたいな…

「今日は泊まっていて下さい」

「お母さんの許可じゃないの？」

「両親は今日帰ってきません。妹は…帰りが遅いですね…」

「迎えに行つてあげなよ」

「あ、メールが…」

そのメールは妹さんからのようで、友達の家泊まるとのことだった。

「またですか…男の子の家ではないでしょうね…」

「私は男の子の家にいるけど」

「それとこれは話が違います」

違くないよ…多分だけど、妹さんは大丈夫だと思う。

「さて、お風呂の準備してきます」

そう言つて比呂士はベッドから出た。…いつのまにズボンはいたのだろう…

私は立とうとしても腰が痛くて立てなかった。比呂士とは、体力の差がありすぎる。比呂士のペースだと私の体は壊れちゃうかも…

「痛い…」

「腰、ですか？お風呂は一緒に入りますか…」

比呂士が部屋に戻ってきた。一緒にお風呂入る…？

「いや、あの…」

「変な事はしません。それだけは約束しますから」

なんか、信用していいのかわからなくなってきた…

「…本当に？」

「約束します」

「…お願いします」

喜んで、と私を抱き上げた。

「やだっ、恥ずかしいよ!」

「何を今更…しかし、軽いですね…きちんと食べているのですか?」

「食べてるよ…」

「もう少し食べても問題ありませんよ」

比呂士は私をお風呂場まで運んでくれた。

…お風呂場も広い。比呂士ってお金持ちなのね…

私は比呂士とお風呂に入った。行為もすることなく、体と髪を洗って風呂を出た。

笑顔

私は朝起きてヒカルに電話した。報告とお礼をするために…

『結衣…？どうした朝から…』

寝起きだったようで、声が掠れてた。

「あ、ごめん。起こしちゃったね…」

休日なのに…

『これから部活だ。モーニングコールサンキュ。で、どうした』

「正攻法が成功法だったよ！」

『…付き合えたのか？』

「うん！ありがとね、ヒカル」

『ああ…結衣、俺達は幼馴染みだ。何かあったらいつでも頼ってくれていいからな』

「…：うん」

「誰と話しているのですか」

「ヒカル、また今度ね！じゃ」

私は比呂士が起きたので慌てて電話を切った。

「ほう…天根くんですか。何を話されていたのです？」

「えと…協力してもらったから…お礼してたの…」

比呂士は納得がいかなかったようで、顔をしかめていた。

「比呂士、部活は…」

「ああ、もう時間ですね…見にきますか？」

「せっかくだけど、今日はいいよ」

部活を見に行けば、安部さんに会うことになってしまう。

「残念ですね…家まで送ってさしあげましょう」

それなら…お願いしようかな…

私は家に帰る準備をした。

「結衣、準備はできましたか？」

「うん」

「行きましようか」

私達は手を繋ぎながら帰った。
幸せ……嫌なことすべて忘れられる。

「あ、家ここだよ」

「ここですか：あなたの家も立派じゃないですか」
比呂士の家よりかは小さい。

ここで別れるんだよね：寂しい：

「時間がある時はあなたと一緒にいますから……」

「うん。部活、頑張ってね」

別れ際にキスをした。

家に入り、私服に着替えた。：どこに行こうかな：母さんのお見舞いに行こうかな。幸村くんにも何か買っていこう。

コンビニに寄り、お菓子を少し買った。幸村くん、食べられるかな……病院に着き、まずは幸村くんの部屋から行くことにした。

「失礼します」

「結衣ちゃん、来てくれたんだね」

幸村くんが笑顔で迎えてくれた。

「昨日は幸村くんがここに入院してるなんて知らなかったから、何も持ってこれなかったんだ。ごめんね：一応お菓子買ってきたんだけど……」

「あ、ありがとう。椅子に座りなよ」

「じゃ、失礼します」

私はベッドの近くにあった椅子に腰かけた。

「昨日、真田の様子がおかしかった。まるで、結衣ちゃんのことを嫌ってるようだった」

「……」

私はどう答えていいのかわからなかった。

「何があったか話してくれないか？」

話して、大丈夫なのだろうか……

「困ったな……俺は結衣ちゃんのことが心配なんだよ」

「…テニス部の輪を乱しちゃうよ」

「イジメがある時点で輪はとくに乱れてる。原因を教えてください」
私は全て話した。安部さんのこと、比呂士のこと…

「安部さんか…柳生のこと好きだって知ってたけど、まさか君と付き合ってるなんてね」

「昨日付き合いましたんだよ」

私達はお菓子を食べながら話をした。

「弥生さんはイジメのこと知ってるの？」

「言っていないよ…」

言えない…がっかりさせたくないから…

「そう…あ、このあと弥生さんに会うのに、暗くさせちゃったね…」

「大丈夫だよ。じゃ、幸村くん。また来るからね」

「ああ、ありがとう。またね」

私は幸村くんの病室をあとにし、母さんの病室に向かった。

「こんにちは、母さん」

「結衣、いらっしゃい」

母さんは優しく微笑んでくれた。

「今、幸村くんのところ行ってきたんだよ」

「そう…結衣、あなた学校で何かあった？」

…どうして母さんまで聞くるんだろ…

「あなた、痩せてきてるし、表情が暗くなってる。何かあったの…？」

母さんが私の腕を強く掴む。…痛い…母さん、こんなに腕細いのに力が強い…

「言え」

「母さん、痛い…」

「弥生さん！何してるんや！」

マチコさんが入ってきた。母さんは我に帰ったみたいで私の腕を放した。

「マチ…私…」

「弥生さん、落ち着いて下さい。身体に響きますよって」
「母さん……」

こんなに取り乱してる母さん、初めてみた…

「結衣ちゃん、出直してくれるか？」

「……はい」

私は病室を出た。…私のせいなの…？

どうしよう…このあとどこ行けばいいのかな…

足が重たい…家に帰ろう…

私は家に帰り、ベッドに横になった。

母さんの目、鋭かった…

考え事をしてると、チャイムが鳴った。

「結衣ちゃん、ウチや。マチコや」

「マチコさん…？」

私はドアを開けた。

「邪魔するで。さっきはすまんなあ…」

「いえ…」

「話があるんや。聞いてほしい」

私はマチコさんを部屋に入れた。

秘密

「マチコさん、コーヒーでいいですか？インスタントですけど…」
「ええよ。おおきにな」

私はコーヒーを二人分用意した。

「結衣ちゃん、怖かったやろ？」

「え…？」

「弥生さんや」

…正直にいうと、怖かった。

「ウチかて怖いわ。なんせ、レディースの元総長やったからなあ」

え…そんな話、聞いてない…

「本当、ですか…？」

「ホンマや。でも、根は優しい人なんやで」

いつも優しい母さんしか見たことしかなかったからレディースにいた時の母さんが想像できない。

「優さん…結衣ちゃんのお父さんに会ってから変わったんや」

「……」

私は黙って聞いてた。

「弥生さんは怖がらせんように隠してた。でも、愛する娘がイジメ受けててムカつかん親はおらん。だから取り乱しもうたんや」

最初はたしかに怖かった。でも、母さんがレディースにいたのは過去の話だし、今とは関係ないんだ。

「マチコさん、話してくれてありがとうございます。大丈夫ですよ。過去がどうあれ、母さんへの接し方は変わりませんから」

「ええ娘さんやな…あ、イジメの事、ウチが話してしもたからな」

「はい。今度は私から話しますので」

「それがええ。ほな、ウチ帰るな。コーヒーごちそうさん」

マチコさんは帰った。

このことは誰にも言わないでおこう。言う必要もない。

時計を見ると、もうお昼をまわっていた。

お昼ご飯何作ろうかな…

お昼はなんとなく炒飯を作った。

「味付け…薄かったかな…」

味付けの事を考えていたら携帯が鳴った。

「メールだ…」

メールは比呂士からだった。

『部活が終わりました。このあと会えませんか？』

私は大丈夫だよと送った。

『では結衣の家に行きますね。一度家に帰りますので少し遅くなるかもしれません。すみません』

律儀な人だなあ…昨日の比呂士とは大違い。私は笑ってしまった。

「早く来ないかな…」

チャイムが鳴った。私は確信してドアを開けた。

「いきなりドアを開けるのは感心しませんね…何されるかわかりませんよ」

こんな風にね、と比呂士は私の手を引き、抱きしめた。

「比呂、士…こんなところで…」

誰かが見てるかもしれない…そう考えるとすぐく恥ずかしかった。

「ああ、すみません。あまりにもあなたが無防備なので」

「もう…早く家に入って」

比呂士はお邪魔します、と言って家に入った。

「食事中でしたか…」

食べかけの炒飯を見て比呂士が言った。

「うん…でももう食べられないから…」

「食べて下さい。身体がもちませんよ」

「大丈夫だよ」

「ダメです」

比呂士は炒飯をスプーンですくい、私の口元に近づけた。でも私は食べなかった。

「仕方ないですね…」

比呂士は炒飯を口に入れた。……まさか、

「ちょ、待っ」

思ったとおりだった。口移し…

「薄味ですね、炒飯。これすべて先程のように食べさせてさしあげますよ」

「け、結構です！」

私は慌ててスプーンを奪い返した。比呂士はそれを見て笑っていた。

「比呂士、食べたの？」

「いえ、まだですが…」

「薄味の炒飯でなければあるよ」

「では、いただきます」

比呂士の分もよそった。

「美味しくないでしょ？」

「いえ、薄味ですが美味しいですよ。身体にもいいですし」

…比呂士って、本当に優しい人…

「正直に言ってくれていいのに…」

「まったく、謙遜しなくて良いですよ。この話はここまで」

「はい……」

私達は食事を終えた。お皿を流しへ持っていく、洗い始める。

「手伝いましょうか？」

「大丈夫だよ。比呂士は座ってて」

比呂士は私の後ろに立った。

「座っててって言ったのに…」

「落ち着かないんですよ。ふう…」

比呂士は腕を回してきた。

「比呂士、なんか…」

「新婚みたい、ですか？」

比呂士もそう思ってたんだ…嬉しいな…

「私はずっとあなたを愛しますから…」

「プロポーズみたいだね、それ」

「そのつもりですが」

私は顔が紅潮していくのがわかった。

「耳が赤いですよ…」

「あ……」

耳元で囁いた。自分は耳が弱いことがわかった。

「比呂士、落としちゃう…」

「仕方ないですね…」

やっと放してもらえた…

私はお皿を洗い終えた。

「結衣」

比呂士が手招きする。私は彼のもとへ行く。

「比呂士、ちょっと…眠い…」

今日はいろいろあった。だから疲れが溜まっている。……昨日のこともあるけど…

「私の膝を貸してあげますよ」

「ありがと……」

比呂士の膝に頭を乗せた。彼はそっと私の頭を撫でてくれた。

気持ちいい…

私はすぐに眠ってしまった。

父親

「気持ち良さそうに寝てるな…」

「ええ…」

「すまないね、娘が…」

「いえ、大丈夫ですよ」

声が聞こえる…比呂士、と……

私は目を覚ました。

「やっと起きたな、結衣」

「と、父さん！」

今日は土曜日のはず…父さんが帰ってくるのは日曜日って言ったのに…

「明日じゃなかったの!？」

「仕事が早く片付いてな…帰ってきたら彼氏連れ込んでるわ、寝てるわ…ま、いいけどな」

いいんだ…父さんは仕事終わって疲れてるのに元気だなあ…

「いやー娘の花嫁姿も近いなー」

「なっ…」

「比呂士くん、娘を頼むよ」

「もちろんです」

なんか、父さんってこんなキャラだったんだ…母さんと同じくらい意外…

「……結衣はお父さんと仲がいいんですね」

比呂士はボソツと呟いた。

「でも、父さんも忙しい人だし、遊んでもらったのは少ないと思うよ」

「比呂士くんの家庭も、忙しいのかな？」

「はい…私は父親と遊んだ記憶すら残っていませんから…」

比呂士がそういうと、父さんが彼の背中を叩いた。

「比呂士くん、どんなに仕事が忙しくても、自分の子を一番に思っているんだ。今度、お父さんと何か話すといい。話題はなんでもいいんだ。ただ話してくれることに喜びを感じるからな」

胸が痛む…私の話は悲しみを与えてしまう…それでも話した方がいいんだよね…

「すみません、ありがとうございます…私はそろそろ失礼します」
「また来てな、比呂士くん」

比呂士は会釈をし、家をあとにした。

「彼は紳士だなあ…で、結衣。俺に聞きたいことがあるだろう？」
「え、まあ…」

「弥生のことか？」

母さんと父さん、なんでこんなにも見透かされてしまうんだろ…

「母さんがレディース元総長って聞いたんだけど、父さんって不良だったの？」

そう言うとう父さんは苦笑いをした。

「俺は普通だったさ。でも母さんは努力家で優しい。そこに惹かれたんだよなあ」

父さんは照れながら話していた。新鮮だなあ…

「今日はお前が聞きたいことを聞いたから、明日は俺が聞きたいことを聞くからな」

「…わかった」

そういえば…晩御飯の支度、何もしてない…

「父さん、食べたいものある？」

「んーご飯と味噌汁があればいいよ」

父さんの要望通り、ご飯に味噌汁、簡単なおかずを作った。

「お前が作ったご飯食うの、久しぶりだな」

「そうだね…父さん忙しいからね…」

「弥生より上手いかもしれないな、料理」

「私は母さんの料理、あまり覚えてないな…」

小さい頃、母さんが入院したから父さんから少し料理を教わった。

「母さんもすぐ退院できるよ。そしたら家族3人と比呂士くんでご飯に行こうな」

「な、なんで比呂士と一緒になの!？」

「ああ、それは二人だけがいいよな」

私は父さんにからかわれながら夕食を終えた。

明日は父さんがずっと家にいるんだ…

私は明日を楽しみして眠りについた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1739k/>

テニ恋!!

2011年10月6日20時29分発行